

## 48歳の決断

「やあ久しぶり！」。一歩間違えれば転んでしまいうようなごわごわしたごみ山を、天野史郎・JICA国際協力専門員はすいすい下り、ショベルカーの運転手に声を掛けた。それもそのはず、サモアのタフアイガタ処分場は天野さんにとって庭のようなものだ。2000年12月から3年4カ月の間、JICA専門家だった天野さんは、何度もここを訪れた。「行き詰まると現場に行くんです。何度でもひたすら歩き、角度を変えているんなどころから見る。そうすると不思議にだんだんとイメージがわいてきて、こうすればできるんじゃないかというアイデアが出てくるんです」。

大学卒業後、大手建設会社に就職し、約25年間ナイジェリアやインドネシア、ネパールでの石油精製所や水力発電所の建設工事などに携わってきた天野さん。廃棄物管理に初めてかかわったのは1989年、アメリカの土木系廃棄物処理会社に向かった時だ。廃棄物処理は衛生工学・土木工学といった技術的な分野だけでなく、環境教育や経済学、社会学など幅広い分野に関係し、なおかつ当時は会社の中では携わる人が少なくて面白そうだったと思った。

国際協力の道に入ったのは48歳の時。「父親の死など自分の人生を振り

JICA国際協力専門員  
Amano Shiro

## 天野 史郎さん

ごみ山で作業するショベルカーの運転手に気さくに声を掛ける天野さん



ごみ山を駆け下りていく天野さん



## 「プロに成長していく人たちの姿に勇気付けられる」

25年間勤めた会社を早期退職し、国際協力の世界に転身した天野史郎さん。グローバル化に伴うライフスタイルの変化によって深刻化する大洋州の島々のごみ問題に取り組む様子取材した。

第7回

## ゲンバの風

文・写真＝今村 健志朗（フォトグラファー）

返る出来事がいくつか重なりました。それから、直接的に人のためになる仕事をしたと思うようになったのです。

ちょうど勤めていた会社で早期退職者を募集していた。最初家族は反対したが、結局「人生一度きり。好きなようにしたら」と妻が背中を押してくれたという。そして、初めての国際協力の現場がJICA専門家として訪れたサモアのタファイガタ処分場だった。

「初めはあまりのひどさに途方に暮れました」。しかし今では臭いすら気にならない。それは日本の衛生的な埋め立て技術を開発途上国に適用する「福岡方式」との出会いがあったからだ。多くの開発途上国で処分場改善にかかわった松藤康司・福岡大学教授をサモアに招き、そのノウハウをサモアの人たちと一緒に学んだ。そして今や、大洋州における廃棄物処理施設のモデルサイトと言われるまでに育て上げた。

### 熱き行政マンを育てる

サモアで大きな成功を収めて、天野さんは04年9月に広域企画調査員としてパラオに赴任。ミクロネシア三国（パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島）で協力の可能性を探る仕事に携わった。05年9月からJICA国際協力専門員として世

界中の廃棄物分野事業の企画、案件形成、実施指導・助言、評価などを行ってきた。昨年3月から1年間で訪れた国は、インドネシア、パラオ、パナマ、カンボジア、ミクロネシア連邦、ドミニカ共和国、エルサルバドル、フィジー、サモア、シリア、パキスタン。出張が続くと、「朝目覚めたとき、ここはどここの国だっけ？」と分からなくなることもあった」と笑う。

「ごみは毎日発生するので、毎日処理し続けなければならない」。天野さんは廃棄物管理の重要性は、継続することにあるという。「処理施設を建設しただけでは、問題の解決にはなりません。日常の適切な運営管理を継続することが重要で、そのための予算確保や人材育成が欠かせません。また、一般市民や民間セクターの協力なしに改善は難しい」。

さらに、島国は国土が散らばっており、物理的にも土地利用の制約が多いなど、廃棄物管理をめぐる環境は厳しい。「モノの流れが一方通行で、島に入ってきた物資は最終的にすべて島にとどまってごみになります」。それだけではない。島国ではもともと人材が乏しい上に、優秀な人材ほど転職したり海外に流出してしまふ。

「賽の河原で石を積み上げる」——天野さんは国際協力をこう例える。



ガス抜き管と発生ガスを点検する天野さん（右）。「先端から浸出水が吹き出て、スプーンで元のろ過装置に拡散します」とごみから出た汚水を処理する原理を説明（下）



「こちらが支援をしても期待を裏切られることが多いのですが、それでもあきらめずに協力を続け、壊れないように地道に石を積んでいくことです。熱い心を持った、名もなきプロフェッショナルを育てていきたい」。途上国の行政官は現場に足を運ばないことが多いが、「現場での研修が彼らを劇的に変化させることがあります。そして学んだ技術を使い、援助機関に支援を求めず限られた予算で施設を改善・建設できるようになります」。天野さんが勇気付けられる瞬間だ。

「彼らの心にかんじて火をつけるか。そのためにはこちらも熱い心を持つていなければなりません」。天野さんはそう言い残し、国際協力との出会いの地、タファイガタ処分場のごみ山を軽い足取りで駆け上っていた。

（8ページに関連記事）

### あまの・しろう

1951年山口県出身。76年大阪大学工学部卒業後、大成建設(株)に就職。在職中は、ナイジェリアでの石油精製所建設や、インドネシア、ネパールなどで水力発電所建設に従事。その間にアメリカへ留学。土木系廃棄物処理会社へ出向。2000年に退職し、廃棄物管理分野のJICA専門家として地域国際機関「太平洋地域環境計画(SPREP)」の本部があるサモアに赴任。04年にJICA企画調査員としてミクロネシア三国(パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島)の調査などに携わり、05年より現職。



タファイガタ処分場の責任者エハイマロさん(左)らと話し合う

